

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Mexican Americans : Resistance and Creativity

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-01-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 悦子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000791

I

「第二章」◆メキシコ系アメリカ人の来た道——歴史的経緯

メキシコ系アメリカ人とは概括的呼称であり、現実には各州で異なった呼称がある。ニューメキシコ州北部とコロラド州南部ではスペイン系アメリカ人かイスパノ（スペイン系の人）、テキサス州ではテハーノ（テキサスの人）、ラティノ（ラテン人）、ラテンアメリカン、アリゾナ州やコロラド州東部や中西部や太平洋岸の北西部の一部ではメキシカンと呼ばれている【Cortés 1980: 697】。このように呼称は異なるが、ほとんどの人が自らをメキシコ系だと考えており、ニューメキシコ州北部とコロラド州南部の一部の人だけがスペイン系という呼称にこだわる。メキシコ系の人々はスペイン系の存在を無視しがちであるが、私はその存在を認めるべきだという立場にある。確かに、スペイン系の人口はメキシコ系にくらべて少数で、八〇万ほどにすぎないが【Swadesh 1980: 950】、現実には自らがスペイン系だとする人々がいる限り、無視するわけにはいかない。自らのアイデンティティこそが各人の帰属を最終的に決める要因であるし、ニューメキシコ州北部とコロラド州南部ではスペイン系の人々がメキシコ系と異なってくる社会経済状況があると考えられる（Ⅱ部参照）。

メキシコ系に相對する民族呼称はアングロである。この呼称は南西部諸州で普及しており、主としてメキシコ系の人々が白人系のアメリカ人に言及する場合に使われる。批判的な意味がこめられており、白人系アメリカ人のなかには、この言葉こそ逆差別用語であると指摘する人が多い。白人系のアメリカ人といっても、様々な民族的背景

があり、アングロとよべない人も多いからである。そのため、私は「アングロ」という言葉を使うのにためらいを覚えるが、現地でよく使用される用語なので採用することにした。

右記のような約束事を前提にして、以下にメキシコ系アメリカ人の辿ってきた道を概説したい。第一節では時代順に各州でこの人々が少数民族集団になっていった過程を追う。第二節では一九六〇年代の復権運動の諸相を報告したい。第三節でヒスパニック（ラティノ）の政治的運動を扱ったのは、それが一九六〇年代の復権運動を止揚する動きの一つである、と私は判断しているからである。

一・民族集団化への過程

メキシコ系の人々の歴史の掘り起こしは遅れている。一九六〇年代の復権運動の影響を受けてアングロ系中心の史観を否定する立場を打ち出した書物が多く世にでたが、一九七〇―八〇年代になって初めて客観的な事実を裏付けられた歴史書が出版されるようになった。これらの成果に頼りながら、南西部でメキシコ系の人々が民族集団とになっていく過程を追ってみたいと思う。まず、彼らがスペイン国民、ついでメキシコ国民であった時代から説き明かしていこう。

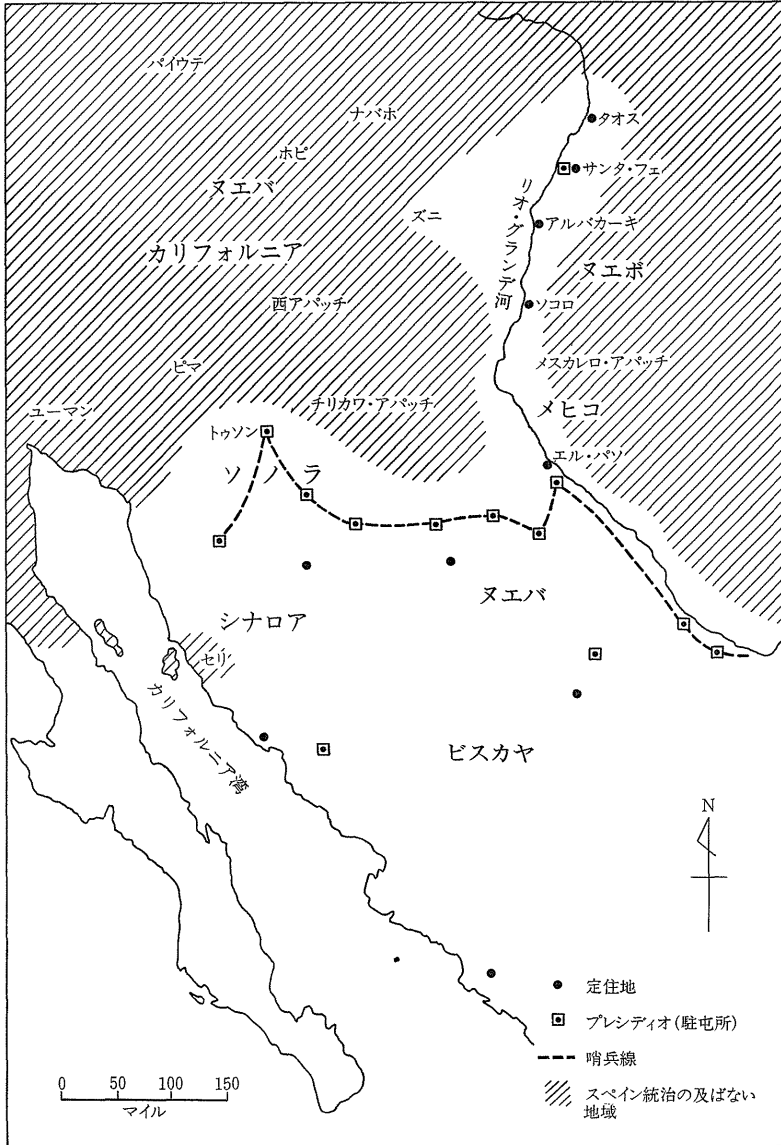
(1) スペイン（一五四〇―一八二二年）とメキシコ（一八二一―一八四八年）の北方領土時代

南西部がスペイン領であったのはコロナドの探検隊が一五四〇年に大平原にわけ入ってから、一八二一年にメキシコがスペインから独立するまでの約二八〇年である。同じ南西部がメキシコ領であったのは一八二一年から、メキシコが合衆国との戦争に敗北してグアダルーペ・イダルゴ条約を結ぶ一八四八年までの二七年間である。結局、

南西部がスペインとメキシコの北方領土であったのは三〇〇年余ということになる。

この北方領土についてメキシコの人類学者レオン・ポルテューリヤは示唆に富む指摘をしている。それによると、アメリカ人が南西部とよぶ地域はメキシコ人からは北部（ノルテ）とよばれる土地であり、国家のヘゲモニーの及ばない辺境であった。スペインによるメキシコ征服後すぐさま探検された土地でありながら、「人間に敵対する荒地」であり、「野蛮なチチメカ（七―十二世紀にメキシコ中央高地に攻め入った諸民族集団の総称）の住む土地」とされ、容易に植民されない地域であった。銀山で栄えたサカテカスより北は蛮族の地でしかなかったのである（地図一）。そのため、この地に入植した者の数は少なく、少数の人間がインディアンの出没する広大な荒地で生存していくためには集団で暮らすより方法はなかった。フランススコ会やイエズス会の宣教師が教会を建て、それを中心にして植民者が村をつくり、国王や副王から授与された土地を耕し、共有林や水利権を守りながら共存していた。農業に加えて、自由放牧の牛や羊の飼育が仕事となり、ロデオが村のイヴェントになった。このような生活をレオン・ポルテューリヤは北方型（ノルテニヨ）とよび、ここから合衆国のカウボーイ生活が由来したと説いている【Leon-Portilla 1972】。付け加えていうと、北方型の生活ではカトリックが人々の宗教であり、主にフランススコ会がもたらした祝祭や芸能が定着し、ギター音楽が好まれ、コリード（物語詩）やバラッドとよばれる詩が朗唱された。民芸としては金銀のすかし細工、リオ・グランデ・スタイルの織物、錫や鉄の製品、祭壇と聖人像の木彫が発達した【詳細は Campa 1979】。この北方型の生活スタイルにも現実にはかなりの地域差があったようである。

ニューメキシコ州への植民は一番早く、一五九八年にオニャーテに率いられた兵士、宣教師、植民者がリオ・グランデ河上流に到着した。その後、一六八〇年にプエブロ・インディアンの反乱が起こり、一六九二年にデ・バルガスにより再征服されるまで、この地のスペインによる支配は中断されたが、植民活動はリオ・グランデ河沿いに



地図1 18世紀のヌエバ・エスパーニャ北西部 (León-Portilla 1972: 97より作成)

進み、農牧業に依存する村落共同体が点在するようになった。しかし、この植民の前線が現在のニューメキシコ州の北部を越えて拡大することではなく、一九世紀のはじめになってから、余剰の人口が農地と放牧地を求めて同州の東西南北にのびていくところだった。しかし、その矢先にアングロが多数入ってくるタイミングとなった。当時のニューメキシコのスペイン系の人口は約六万人とされている [Moore 1970: 12, Rosenbaum 1981: 20-22]。

植民者主導型のニューメキシコと対照的なのはカリフォルニアの植民で、ここでは政府が中心となって植民が進められた。このスペイン領土は永く捨ておかれたが、英国とロシアの進出を恐れ、スペイン政府は一七六九年に探検隊を派遣し、その翌年より人材を送りこみ、サン・ディエゴからサンフランシスコに至る海岸沿いにカトリックの伝道区と村を建設した。ミッシェンの活動に重きがあり、植民者は一八二六年になっても八〇〇〇人という少数であったが、大牧場を経営する豊かな生活が保証された。メキシコ本国における自由主義的改革の余波をうけて一八三一年には教会領の売却がはじまり、植民者は土地を買い加えたので、大方の植民者は大土地所有者となった。この直後にアングロのカリフォルニア進出がはじまった [Rosenbaum 1981: 28-30]。

テキサスの植民はニューメキシコとカリフォルニアの中間的な型で進んだ。地理的にみると、テキサスはメキシコ湾岸沿いのテハスとニューメキシコ側のヌエボ・サンタンデルに分かれる。このうち、テハスでは牧牛と農業を生活の中心にするカリフォルニア型の植民が進んだ。一方、ヌエボ・サンタンデルはリオ・グランデ河沿いの土地なので、ここではニューメキシコと同様に植民者は農業と牧羊に従事し、まとまりの良い村落共同体を形成した。このような地域差があったが、一九世紀初頭にテキサス全体で約五〇〇〇〇人の植民者しかいなかった [Moore 1970: 12, Rosenbaum 1981: 30-36]。

最後に、アリゾナではアパッチの存在が大きかったため植民者が入植せず、トゥソンの城囲都市内に駐屯隊の関係者が固まって住むという状況であった。そのため、一九世紀前半になっても人口は一〇〇〇人ほどに過ぎなかつ

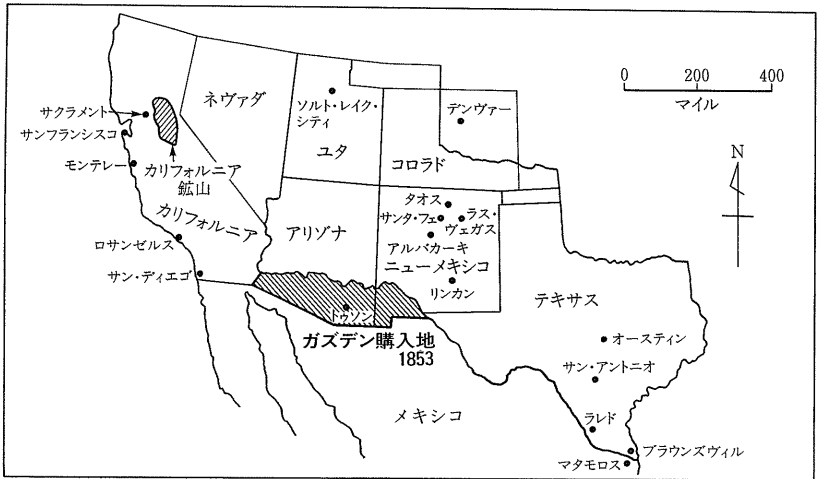
た [Dobyns 1976, Moore 1970: 12, 16]。

右記のことから判断すると、一九世紀の初めにニューメキシコ、カリフォルニア、テキサス、アリゾナの広大な土地にわずか八万人ほどの植民者しかいなかったわけで、そこへ合衆国の利権を担ったアングロ系の人々が進出してくることとなった。こうして二つの民族集団の人々が接触することになったが、そこで何が起こったかを次にみてみよう。

(2) アングロ系アメリカ人との対決——一九世紀半ばから二〇世紀初頭まで

合衆国のメキシコ領への進出はテキサスにはじまった。この地には一八一九年から主に南部人が住みはじめていたが、流入する人口は急速に増え、当時メキシコのコアウイラの一部であったテキサスの買収や独立が企てられた。一八三五年にアングロ系住民によるテキサスの反乱がはじまり、これが高じて一八四六年には米墨戦争（一八四六—四八年）に拡大し、合衆国が勝利を納め、一八四八年にグアダループ・イダルゴ条約が結ばれた。この条約でメキシコはリオ・グランデ河を国境と認め、南西部（今日のカリフォルニア、アリゾナ、ニューメキシコ、テキサス、ユタ、ネヴァダ、とコロラドの一部）を合衆国に売却した（地図2）。領土の割譲はこれで終わらなかった。合衆国は大陸横断鉄道の南ルートを開くためにメソリーヤ・ヴァレー（アリゾナ州の南部分とニューメキシコ州の南西部分）の売却をメキシコに迫り、財政上の危機にあったメキシコは一八五三年にこの地域を手放し、ガズデン購入地として合衆国領に加えられた [Cortés 1980: 702]。こうして、メキシコはスペインから独立して三〇年も経たない内に領土の約半分を失ってしまった [Acuña 1972: 9-33; Rosenbaum 1981: 18]。ちなみに、このとき、合衆国が獲得した領土は全領土の約三分の一にあたる [Moore 1970: 12]。

グアダループ・イダルゴ条約のⅧ条とⅩ条でメキシコ系住民の財産と市民権の保証が確約され、Ⅹ条で同住民へ



地図2 南西部諸州 (Rosenbaum 1981: 19 より作成)

の所有地の保証が謳われたが、このX条は最終段階で削除された。このことは後年、チカノ運動家によって合衆国側の不誠実さを示すものとして批判的にされた。しかし、法律の一条項が新しく合衆国市民となったメキシコ系の人々を救済するほどには現実には生やさしくなかった。合衆国領となった南西部にはアングロ系の人々が進出しメキシコ系の人々と接触し、急激な社会変化が起こるが、州ごとに状況は異なったので、以下に各州でのメキシコ系の人々の経験を略述している。

カリフォルニアは短期間にアングロの支配に下った。一八四八年にサクラメント渓谷で金が発見されたことがきっかけになって各地でゴールドラッシュが起こり、陸路と海路から多数のアングロが到着したことはカリフォルニア(当時カリフォルニアに住んでいたメキシコ系の人のこと)にとって不運であったが、人々を同州にひきつけたのは金とは限らず、豊かな土地と温暖な気候でもあった。入植者は数多く、土地を合法、非合法を問わず奪取し、早くも一八八〇年代にはカリフォルニアは没落してしまった。豊かな地主層は団結すれば自民族の利益を守るように政府を動かさせたはずであるが、

それが実現しなかった。彼等は非能率なメキシコ政府の政策に反発し、開明的な合衆国の政策に惹かれながらも、プロテスタントで差別をむきだしにしたアングロに怒りを覚えるという二律背反の状況に陥り、どちらの政府に対しても有効に対応できなかったために、わずか一世代の間にヘゲモニーを失ってしまった。この間、ティブルシオ・バスケス、ホアキン・ムリエッタ、ホセ・ルイス・フローレスといった人々が暴力でアングロの支配に抵抗したが、組織力の弱い反乱であった。アングロ側は彼等を「義賊」と新聞に発表するほどの余裕を持つに至っていた。これに加えてロサンゼルスやサンタ・バーバラでメキシコ系住民の暴動が起こったが、アングロ支配を揺さぶるほどの力にはならなかった。カリフォルニア南部は北部にくらべてメキシコ系の人々が大勢住み続け、北部よりは恵まれた生活をしてきたが、アングロ優勢という時代の流れはここに至るまで及び、土地を失った人々が都市の狭い空間に押し込まれることとなり、この居住区はバリオかコロニアと称された [Pitt 1966: 198-229, Rosenbaum 1981: 28-33, 54-67]。歴史家カマリーヨの研究 [Camarillo 1979] をみると、カリフォルニアが急速に没落し土地を失い、南カリフォルニアの町々やサンタ・バーバラにバリオが出現していった過程が詳細に描かれている。

隣のアリゾナ州ではメキシコ系住民が一〇〇〇人ほどの少数だったので、アメリカ統治の開始はこの人々よりもむしろインディアンに大きな圧迫を与えたが、一八八〇年にはアパッチの抵抗も終わった。これと軌を一にして、鉄道が敷設され、鉱山が開かれ、多数の労働者が必要とされたので、テキサス州づたいや直接メキシコからメキシコ人が入ってきた。これ以外に牧牛や綿花栽培にたずさわった人もいたが、いずれにせよ低賃金労働者であり、人種差別の対象になった [Moore 1970: 16-17]。このように、アリゾナ州ではメキシコ系の人々の問題は他州よりは新しくはじまったものであった。

テキサス州では [Rosenbaum 1981: Chapters 2-3]、メキシコ湾岸沿いのテハスは簡単にアングロの手に落ち、大規模の牧牛業者の制するところとなった。リオ・グランデ河沿いのヌエボ・サンタンデルでは河沿いに村落共

同体をつくって農牧生活を送っていた人々の抵抗が一九世紀末まで続いた。抵抗が長引いた理由としてはメキシコ系の人々の結束が強かったこと、この地方に鉄道が入るのが遅れて二〇世紀初めまで交通の便が悪かったこと、同州に入ったアングロに南部人が多く人種差別が強かったこと、テキサス・レインジャーと呼ばれる遊撃隊の残虐行為がメキシコ系の反発をあおったこと、などがあげられる。こうしてみると、現在でもテキサス州でメキシコ系への偏見と差別が大きい理由が理解できる。

ヌエボ・サンタンデル地方の主な抵抗運動はコルティナとコルテスによって起こされた。ファン・コルティナはリオ・グランデ河沿いのカマルゴの名家に生まれたが、アメリカ統治下になってから家族の所有する土地が法廷闘争に持ちこまれ、当時の多くの例のように、土地を失いアングロ支配に悩まされていた。母親の雇っていた牛飼いがアングロの警察官に不当に射殺されたのがきっかけとなりコルティナは武装し、仲間とともに一八五九年には反アングロの戦いをはじめた。一時はブラウンズヴィルの町を占拠するまでに至り、その抵抗は七カ月続いた。その後、コルティナはメキシコに下り、フランス干渉戦争に参加しメキシコのために戦い、ついで南北戦争時には連邦側に与みし、南部側にまわったテキサスを敵にまわして戦った〔Rosenbaum 1981: 42-45〕。

グレゴリオ・コルテスの抵抗は一九〇一年にはじまり一九一三年まで続いた。発端は保安官とコルテスの会話を通訳した人の訳の誤りから生じたと伝えられる。コルテスと仲間の物語はコリードとよばれる二行連詩で歌われ民間に流布した〔Rosenbaum 1981: 45-49〕。二〇世紀になってメキシコ系の民俗学者アメリカ・パレーデスにより収録され、『ピストル片手に―国境地帯のバラッドと英雄』〔Paredes 1958〕という本として出版された。北方で歌われたもの、メキシコ市で歌われたもの、といった風に様々の版があり、コルテスのイメージがふくれあがってメキシコのフォーク・ヒーローになっていく様がよくうかがえる。ちょうど、米墨戦争時のアラモの戦いで戦死したデイヴィ・クロケットやリンカン郡戦争時のお雇いガンマンのビリー・ザ・キッドがアングロの西部劇のヒーロー

となっていたのと同じようなことである。

その後も小規模な抵抗が続いたが一九一五年の「サン・ディエゴ（テキサス）計画」と呼ばれるものが注目すべき最後のメキシコ側の反抗であった。この反乱計画にはメキシコの反動政治家ベヌスティアノ・カランサが関わり、メキシコ系に加えてインディアン、東洋人、黒人をも含む被抑圧者の共和国の設立が意図されたが、カランサの失脚と同時に運動は途絶えた [Rosenbaum 1981: 49-52]。

最後に、ニューメキシコ州での抵抗運動をみていこう。同州ではスペイン系の人々が六万人も住み、緊密な組織をもった村落共同体をつくって定着していたので、アングロへの抵抗は静かに根強く続き、一九六〇年代に公民権運動期の高まりを経て、現在にまで及んでいる。

同州にアングロが入ったのは公式には一八四六年のことであるが、この頃から一八八〇年代まではスペイン系の人々はアングロの妨害にあうことなく生活圏を拡大することができた。ニューメキシコ州北部の村人が耕地と放牧地を求めてコロラド州南部に入植したのもこの頃であった [Deutsch 1987: 13, 17]。ところが一八八〇年代には状況が異なってきた。鉄道が入り、材木会社が操業をはじめ、石炭鉱が開かれ、商品作物をつくる農業がはじまり、牧羊業が導入されると、スペイン系の人々の土地がアングロの投機の対象となり、ここに土地収奪の歴史がはじまった。スペイン系の人々にとっては土地と権利を防御する闘いのはじまりであった。

ニューメキシコ州の土地問題については一九八〇年代になって専門書が相次いで出版され [Hall 1984, Ortiz 1980, Rosenbaum 1981, Westphall 1983]、その全貌が明らかになりつつある。詳細については各研究書を参照されたいが、事の大筋は次のようである。スペイン、ついでメキシコが植民者に授与した土地（メルセデス・レアレス）は宅地と耕地に加えて共有地への権利を含んでいた。当時は個人で植民できる状況ではなく、リーダー格の植民者と何人かの追従者が共同で村を開く場合が多かったので、授与地は共同体に与えられることが多かった。正確

な測量のできない時代のことであるから、授与地の範囲を記すにあたっては自然の景観に言及する形で土地所有の文書が作成されていた。ウェストフォールの研究 [Westphall 1983] によると、スペイン時代では最初の土地授与は一六九三年にはじまり一八二〇年まで続くが、この一二七年間に一一四の個人と共同体へ授与が行われ、平均して一年に一件以下ということになる。一件につき認められた土地の規模も小さく、主としてタオス以南のリオ・グランデ河支流の土地が多かった。この土地は農牧生活に適した土地であり、植民者の必要に応じて徐々に授与されたと判断できる。ところが、メキシコ時代（一八二一—四六年）になると、メキシコ人と結託したアングロや外国人に次々と大規模の土地授与がなされ、それがニューメキシコ北部にまで至り、土地の境界に法的根拠の定かでない例が多かった [Westphall 1983: 36, 122の地図]。

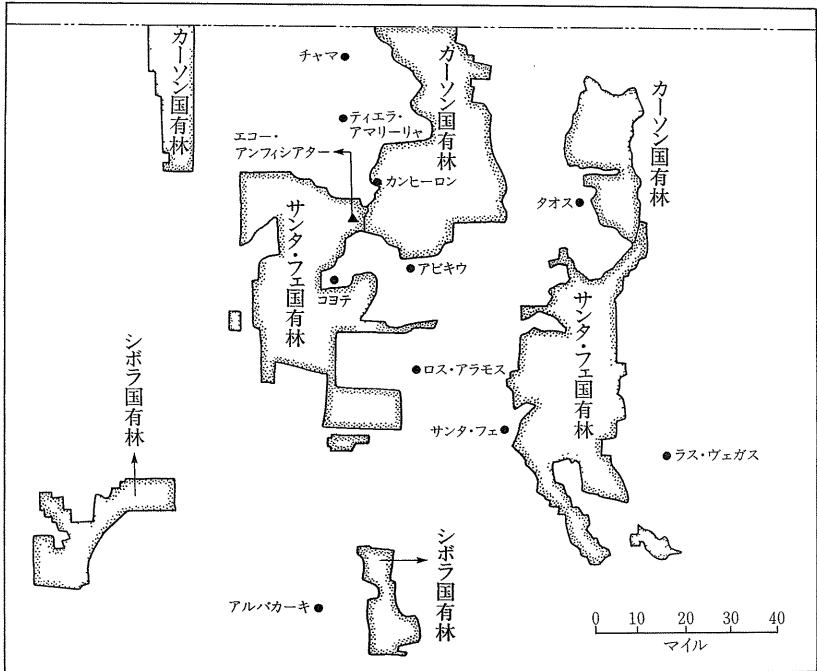
その後のアメリカ統治時代、とくに一八八〇年代以降は牧羊業、鉱山業、材木業が進展したため、アングロによる土地の投機的購入が続き、初めは北部の大規模授与地が投機の対象であったのが徐々にスペイン系の人々の小規模所有地にまで及んだ。測量監督本部は一八五四年に開設され、さらに個人所有地の権利確認のための法廷は一八九一年に創設され、住民の権利を守るために動くはずであったが、実際にはサンタ・フェ・リングと称される州の政財界（スペイン系の有力者をも含む）と結託したアングロの資本家に有利なように事が運ばれた [Westphall 1983]。

そのため、ニューメキシコ州の北部のみならず南部でもスペイン系の人々の抵抗が起こった。北部では、マクスウェル授与地と称される一八四一年に認可されたコロラド州にまで至る巨大な土地が抗争の的となった。この授与地はスペイン系の人々の放牧権やインディアンのバッファロ放牧地を侵害しているにもかかわらず認可され、授与当初から問題が多かった。悶着の末、政治家が介入して一八六〇年に法的権利が確認されたが、一八七〇年には英国の資本家、次いでオランダの資本家に転売され、マクスウェル土地・鉄道会社が発足した。その後も会社とスベ

イン系の小土地所有者の間に争いが続いたが、一八九〇年頃になると法的には会社の勝訴が確定的になった
 [Rosenbaum 1981: 68-90]。

次いで、テキサス州と境を接するニューメキシコ州南部のリンカン郡ではサンタ・フェ・リングとテキサス資本の利害が対立し、リンカン郡戦争（一八七八—一八八〇年）といわれる抗争が続いた。テキサスから入ってきたアングロの牧羊業者とニューメキシコの牧羊業者が土地をめぐる争ったわけであり、両者の血なまぐさい闘いが続いた [Rosenbaum 1981: 83-98]。

抗争が最も長びいたのはラス・ヴェガスを中心とするサン・ミゲル郡であった。この郡には一〇の授与地があり、いずれもアングロへの売却に際しては共同体成員の許可なく共有地までが売却され、スペイン系の人々の放牧と水利権が著しく損なわれていた。その後も小土地所有者のスペイン系の人々は残ったわずかの共有地を守りながら生活していたが、有柵の牧畜業にたずさわるアングロが進出し土地を囲っていくと、脅威を感じ柵を切りたおすなど実力行使にでた。やがて人々は団結して「白い帽子」（ゴラス・ブランカス）という秘密組織をつくり、白い覆面で顔を隠し、騎馬の一群となって柵を切断した。共有地を無視して土地を購入したアングロの柵がねらわれ、納屋や乾草に放火が続いた [Rosenbaum 1981: 111-119, Schlesinger 1971: 87-102]。その「白い帽子」は約一五〇〇人のメンバーをもち、「労働の騎士たち」（ナイツ・オブ・レイバー）というフィラデルフィア起源の労働組合のニューメキシコ支部の支援をうけ、支部長のファン・ホセ・ヘレラが「白い帽子」のリーダーであったと推測された [Rosenbaum 1981: 120-123, Schlesinger 1971: 103, 113]。運動は一八九〇年の夏まで成功を納めた。しかし、この頃から合憲的政治活動に移っていく必要が高まり、「白い帽子」への支援は統一人民党（パルティード・デ・ブエブロ・ウニード）への票となり選挙で大成功を納めた。しかし、豊かな政治家と貧しい一般人との落差は埋めがたく、加えて党派心と私欲が災いとなって政治的効果をあげることができず、統一人民党は一八九四年には勢力



地図3 ニューメキシコ州北部の国有林と関係市町村 (Nabokov 1969 より作成)

を失った [Rosenbaum 1981: 125-145, Schlesinger 1971: 123-126]。

授与地についての大方の法廷闘争もアン
グロ側の勝利に終わり、共有地の概念が否
定されてしまった [Rosenbaum 1981:
99-139]。そして、一八九九年にサンタ・
フェ国有林、一九〇六年にはシボラ国有林
とカーソン国有林が設定されて (地図3)、
スペイン系の人々の放牧地をいちじるしく
制限してしまった。さらに、鉄道敷設のた
めに土地が接収されたことも放牧地の縮小
をもたらした [Swadesh 1974: 70, 80-89,
157, 204]。

右のような状況下で、スペイン系の人々
の共同体は崩壊の道を辿りつつあった。農
牧生活の基盤であった共有地は手放されて
いく場合が多かったし、賃金労働に依存せ
ず生活できる村は極めて少なくなった。最
近の研究 [Deutsch 1987] で明らかにされ

たことであるが、スペイン系の人々はニューメキシコ州やコロラド州で盛んになった材木業、鉱山業、砂糖大根生産や鉄道工事に賃労を求め移動労働者となって生計を立てる人が多くなっていた。こうして、彼等の生活が底辺の労働者のものとなり、アングロから差別視される対象となる過程が第一次世界大戦時まで続いた。

(3) メキシコ移民の増加とその抵抗運動——二〇世紀初頭から一九五〇年代まで

前節でふれたように一九世紀後半にもメキシコ移民はみられた。カリフォルニアのゴールドラッシュにはソノラ州からメキシコ人が参加したし、アリゾナ州のトゥソンには鉱山労働者として入ったり、テキサス州の牧羊業のブーム時には隣接するコアウィラ州などメキシコ北部の州から大勢が出向いた。しかし一八九〇年の統計で見ると、当時のメキシコ生まれの移民の数は七万五〇〇〇人を超えるほどにすぎなかった。ところが一九〇〇年には合衆国生まれとメキシコ生まれを含むメキシコ系の人々の数は三八万二〇〇〇—五六万二〇〇〇の間と推定されている[Cortés 1980: 702]。わずか一〇年間に人口が急増したことがわかる。

さらに、二〇世紀になるとメキシコ移民は爆発的に増えた [Acuña 1972: 121-152, Cortés 1980: 702-704, Moore 1970: 20-30]。この頃から南西部には大資本が投じられ、人工灌漑が導入され、大農場経営(アグリ・ビジネス)が発展し、大量の労働者を必要としたため低賃金のメキシコ人未熟練労働者が歓迎された。木綿、果物、砂糖大根の収穫が主な仕事であったが、鉄道や鉱山で働く人もいた。一九一〇年以前の移民は国境に近い北部の州からきたが、一九一〇年以降はグアナファト、ハリスコ、ミチョアカン、連邦州などの中央部の諸州からも移民が増え [Acuña 1972: 124, Bustamante 1975, Díez-Canedo Ruiz 1984]、合衆国への出稼ぎが恒常的になる予兆を示した。

ポルフィリオ・ディアス政権下にメキシコは合衆国その他の外資を導入し、メキシコの北部と中央部で資本主義の発展をみるが、逆に農民のなかには土地を失いプロレタリアート化する人口が増え、この人々が生活の糧を隣国に

求めたわけであった。またメキシコ革命の動乱を避けて合衆国に渡る移民も多かった。

右の現象が移民の第一波とすると、第二波は第一次世界大戦時であり、戦時経済の好況に乗り、合法・非合法の移民が大量に入国し、この波は一九二一年まで続いた。

一九三〇年代の大恐慌時代には移民は減少したが、一九四〇年代には第三波がはじまった。特に、一九四二年から一九四七年まではブラセロ（雇い人夫）と称される臨時雇いの労働者を送り込む計画が両国政府間で決められ、この五年間に二二万人のメキシコ人が入国した。ブラセロ計画は朝鮮戦争時の労働力不足を補うために一九五一年に復活し、一九五九年には入国した労働者の数が四五万というピークを迎え、一九六四年まで続いた。ブラセロ計画はこれで終わったが、その後もグリーン・カードをもらって臨時雇いの労働者として入国することが許可された。このように合法的に入国する者に加えて不法入国者も多く、河を渡って濡れてくることからスペイン語でモハード(mojado)、『英語でウェットバック (wetback)』と呼ばれたり、国境にはりめぐらされた金網をくぐってくることからスペイン語でアランプリスタ (alambrita) とも呼ばれた。こうして、時間がたつにつれ永住ビザを持つメキシコ系の人々が増え、一九四〇年代にはメキシコ系労働者が南西部のみならず中西部の産業やサーヴィス業にまで進出するようになり、移民制限を求める声が高まり、一九五〇—五五年には不法入国者の送還が強行された〔Acuña 1972: 123-152, Moore 1970: 29-30〕。

右に明らかのように、メキシコ人移民や労働者の導入は合衆国の労働市場によって決定されており、メキシコ系の人々が本国よりは恵まれた生活を送れるとはいえず、合衆国では低辺の生活をよぎなくされた。この悪状況を改善すべく徐々に相互扶助組織がつくられ、労働争議や政治運動が企てられた。

相互扶助組織の多くは泡沫的であったが、一九二〇年代にテキサスで中産階級を組織したLULAC（ラテンアメリカ統一市民連盟）の活動が効果を生み、メキシコ系の人々の生活の改善とアメリカ社会への参入に努力が向け

られた。労働組合はメキシコ系住民が最も必要としたものであり、一九二〇—四〇年代にカリフォルニアやテキサスの農業労働者やアリゾナやニューメキシコの鉱山労働者の間で組織され、数々のストライキを打った。カリフォルニア州ではインペリアル・ヴァレーのメロン農場労働者のストライキ（一九二八年）、デル・モンテ社のイチゴ農場労働者のストライキ（一九三三年）、アーヴィンのディジョルジョ農場労働者のストライキ（一九四七年）、テキサス州ではサン・アントニオのクルミむき労働者のストライキ（一九三八年）、ニューメキシコ州の鉱山ストライキ（一九三四年）などが代表的なものとしてあげられる【Acuña 1972: 153-221, Cortés 1980: 708-711】。

アメリカの他の民族集団と同様に、第二次世界大戦へのメキシコ系の人々の参加は生活の改善につながった。今まで自分の生活圏を離れたことのない人々が軍隊に入って海外に派遣されたため、異国を知る機会にもなった。そして戦場から戻った後に与えられた幾つかの特権を活用して生活を向上し、同時に同民族集団の地位の向上に努力する人が増えた。G・I・フォーラムはテキサスの復員兵士のつくった組織であり、差別に抵抗し、民族集団の意識を改め、生活水準の向上に努めた。この頃、この種の団体が数多く組織され、徐々にではあるが効果をもたらした。また、この頃からメキシコ系住民の中で都市居住者が増え、都市バリオの問題が浮上してきた。一九四二年にロサンゼルスで起きたスリーピー・ラグーン事件にみられる警察当局の抵抗や翌一九四三年にイースト・ロサンゼルスで起こったズート・スーツ（ひざまで届く肩幅の広い長い上衣と、すそでくくっただぶだぶの長いズボンからなる服で、戦時にメキシコ系の若者の間で流行した）の反乱にみられるアングロ系兵士と海兵隊への抵抗は都市での生活不安の増大を示す例としてあげられる【Acuña 1972: 202-208, Romo 1983: 166】。

このように、一九四〇—五〇年代にかけてカリフォルニア州やテキサス州で小規模ながら積極的な政治運動が展開され、折から黒人の復権運動が上げ潮に乗りつつあり、新たな動きが期待されるところで一九六〇年代に入った。

以上、メキシコ系アメリカ人という存在が生成し現在に至る過程を時代順に捉え、各時代における各州の動向を紹介してきたが、その結果、州ごとの状況の差がいかにか明らかなのである。そこで、各州の特徴をここで要約しておくのがよいだろう。

カリフォルニア州ではゴールドラッシュと豊かな土地が災いして、アングロの急速で膨大な流入をみた。そのため、大土地所有者で豊かな生活をおくっていたカリフォルニアは短期間に没落し、一九世紀末には早くも都市パリオが出現した。二〇世紀になると、アグリ・ビジネスに吸収されたメキシコ人労働者の数は多めで、社会の低辺を形成した。このような背景があるため、一九三〇—四〇年代に抵抗運動やストライキが頻繁に起こり、改革の気運をもちあげながら一九六〇年代に至った。

アリゾナ州では一九世紀半ばまでは少数のメキシコ人居住者が駐屯兵との関わりで居住していたが、その後の同州の動向に影響を残すことはなかった。一九世紀末と二〇世紀に、多数のメキシコ人労働者が入ってきたので、これらの比較的新しい移民が同州のメキシコ系人口をつくっている。

コロラド州の南部には一九世紀末にニューメキシコ州北部から入植したスペイン系の人々がいるので、後述するニューメキシコ州と同様の状況がある。他の地域では、メキシコ系の人口がほとんどで、移動労働者や都市バリオの問題を抱えている。

ニューメキシコ州では一六世紀以来リオ・グランデ河沿いにスペイン系の人々が定着し、農牧生活を営み結束の強い共同体を形成してきた。合衆国領となってから相次ぐ土地収奪におびやかされ、貧困化しつつも生存し続け、現在に至っている。現在では、同州にはメキシコ系の人口も多いが、今なおスペイン系と自称する人々の存在がこの州の文化的政治的特徴を形づくっている。

テキサス州ではリオ・グランデ河沿いにメキシコ系の定着農民の共同体が形成されていたが、接触当初からアン

グロからの圧力が強大であった州だけに、ニューメキシコ州とは異なり、伝統的なものは押しつぶされた。米墨戦争はテキサスにはじまるが、それ以降、特に二〇世紀に入ってからメキシコ人が多数流入しており、彼等へのアングロの偏見と差別は極めて強い。

このように、州ごとにメキシコ系の人口（スペイン系を含む）が辿ってきた道が異なるので、民族復権運動の争点と方法も州ごとに異なってきたり然るべきである。このことは一九六〇年代のチカノ運動に明確に認められる。

二・一九六〇年代の復権運動

一九六〇年代にはメキシコ系アメリカ人の復権が叫ばれ、ケネディ政権（一九六一—六三年）とジョンソン政権（一九六三—六九年）の下での公民権運動の高まりにのって、黒人のブラック・パワーやネイティヴ・アメリカンのレッド・パワーと連繋を保ちながらチカノ運動が浮上してきた。チカノの語源は明らかではないが、文化的ルーツを認識しアイデンティティの確立を求めるメキシコ系の人々のことを示しており、この人々が志す復権運動のことをチカノ運動と呼んでいる。既にのべたように、メキシコ系の人々の生活状況は州ごとに特徴があったので、これに応じて政治的指導者が現れた。カリフォルニア州では農業労働者の組合活動を推進したセサル・チャベス、コロラド州ではデンヴァー市のバリオの青年の生活の改革をめざしたコーキー・ゴンサレス、ニューメキシコ州では土地返還運動を起こしたライエス・ティヘリナ、テキサス州では郡レベルの政治への参加を提唱したホセ・アンヘル・グティエレスが代表的なリーダーとして浮上した。私はこの四人のうちティヘリナとしか会っていないが、文献でみると、各々個性的で、その主張と運動方法がいかにこの民族集団の人のものらしい。チャベス以外のリーダーとその運動については文献が多くはなく、主な事実を伝えることしかできない。チャベスについては、ここで

概略し、詳細は第二章でのべる。

(一)セサル・チャベス、コーキー・ゴンサレス、ホセ・アンヘル・グティエレスの活動

カリフォルニア州のデラーノに本拠を置き同州の農業労働者の組合運動に尽力したセサル・チャベス [Acuña 1972: 176-183, 224-225, Fitch 1974: 360-365, Steiner 1970: 310-323] に対してはアメリカでの評価が一番高い。チャベスは一九二七年にアリゾナ州ユマに生まれ、一〇歳の時に父親は土地を失い、移動労働者となり、彼は各地の学校を転々とし、小学八年生になった時に学校をやめて農場で働くことになった。その後、一九四〇年代に家族はカリフォルニアのサンノゼに来て最低辺のバリオに住みついた。一九三九年頃に父親が組合活動をはじめ、セサルも影響されて一九歳でNAWU(全国農業労働者組合)に参加し、組合活動の難しさを学んだ。また当時、カトリックのマクドネル神父と親交を結び、社会事業にも目を開かされた。それから一〇年間ほど同州のコミュニティ組織者として働き、草の根の活動方法を学んだが、心に懸かっていた農業労働者の組合運動に転じ、デラーノに事務所を持ってメキシコ系、フィリピン系、黒人、日本人の労働者を組織した。

一九六二年に彼が組織したNFWA(全国農業労働者連合)の組合員は一七〇〇人を数えたが、この力だけではアグリ・ビジネスに対決できないと判断し、公民権運動関係者と教会勢力に助力を求めた。チャベスの非暴力の姿勢が賛同をえて協力者が増えた。チャベスは女性、特に母の力を重要視し、教会に信頼を寄せていることをジャーナリストとのインタヴューで明らかにしている。デラーノの事務所付近に祭壇をつくり、ストライキの行進にはグアダルupesの聖母の絵を描いた幟をかかげた。このようにメキシコ的な宗教シンボルを人々の統合のために使ったが、組合運動の進め方は現実的であった。ボイコットなど強行手段をとるべきときはとり、かたやストライキの成功のためには妥協も敢えて行ない、NFWAと他の組合を統一してより大きなUFWOC(統一農業労働者組織

委員会)を組織して、六〇年代にはカリフォルニアの各地でストライキを勝ちとった。

一九六五年頃にこれらのストライキの成功が全国的に報道され、ロバート・ケネディを初めとする政治家がデラーノにいるチャベスを訪問することが多くなったが、その頃からチャベスは多くの問題を抱えるようになった。組合員内にみられるメキシコ系とフィリピン系の軋轢、不法入国者の取扱い、農場の機械化による失業の増加、組合組織の官僚化などであった。またチャベスの指導力を都市のバリオの組織化に役立てるよう望まれるようになり、この要請にどう対応するかといったことも問題になってきた。

寡黙で辛抱強く、時として宗教的なセサル・チャベスと対照的に、コロラド州のリーダーであるコーキー(正式にはロドルフォ)・ゴンサレス [Acuña 1972: 241-244, Steiner 1970: 378-392] は明るいイメージの活動家であった。一〇代には彼は人気の高いボクサーで、チカノ青年のアイドルであった。しかし更衣室でガルシア・ロルカの詩を読んだボクサーはまもなくリングを去り、チカノ復権運動に身を投じ若者に夢を与えた。

コーキー・ゴンサレスはデンヴァーのバリオに生まれた。父はメキシコ移民で農場や鉱山で働いた。彼も一〇歳から砂糖大根畑で父と一緒に働いた。春と夏は農場で暮らし、秋と冬はデンヴァー市のバリオに戻ってくるという生活であった。食肉処理場でアルバイトをして高等学校を卒業したが、貧困から逃れるためにボクサーになったのであった。ボクサーをやめてから実業家に転じたところ成功し、政治運動にも参加しはじめた。二九歳でデンヴァーの民主党の地域長となり、一九六〇年のケネディ大統領領選にはコロラド州の協力者として大活躍した。数々の委員会に名を連ねたが、そのうち、政府の貧困対策に失望した。メキシコ系の民族票をとるために民主党に利用されていることを悟りはじめた頃、貧困対策用の資金を盗んだという疑いをかけられた。疑惑は晴れたが、これを契機に政界から身をひいた。

彼はバリオに戻り「正義のための十字軍」(クルサーダ・パラ・フスティシア)の運動を開始した。チカノとア

ングロの有志の寄付をえてデンヴァーの下町にある古い教会を買い取り、チカノ文化センターにした。州や国の介入をさげるため公費を受け取らず、人々による自主管理を大切にした。一九六八年の夏には同センターでチカノ青年解放会議を開き、チカノの歴史的遺産をたたえチカノの独立を呼びかけた。

詩心を失わぬコーキー・ゴンサレスは一九六七年に『私の名はホアキン』[Gonzales 1967]を発表し、アステカやマヤの歴史から歌いはじめ、若者が文化的アイデンティティを大切にしていって雄々しく生きることを読説した。「私はホアキン。グリーンゴ(アメリカ人のこと) 社会の渦に巻き込まれ、規則に混乱を覚え、態度で馬鹿にされ、手練手管で抑圧され、近代社会に破壊された。私たちの父たちは経済的には破れたが、文化的には生き残った」と歌い、なお一層の努力を人々に求めた。この小さな詩集は六〇年代のチカノ青年のバイブルとなった。

テキサス州では、ホセ・アンヘル・グティエレス [Acuña 1972: 233-237] がチカノの政治参加を呼びかけた。最初、彼は学生を集めて MAYO (メキシコ系アメリカ人青年組織) をつくり、青年の意識の変革をめざして過激な発言をくりかえした。そして一九六九年にクリスタル・シティの高等学校でメキシコ系の学生に対する差別が問題になったのを契機にメキシコ系の組織化を試み、統一民族党(ラ・ラッサ・ウニダ)を創設した。同党の活動はクリスタル・シティをはじめテキサス各地の教育委員会に代表を送り込むことから始まり、物資の共同購入や差別的な企業のボイコットに向かった。さらに、郡レベルの政界に代表を送り込むべく努力したが、同州で重きなす石油業界の圧力がかかり、必ずしも成功を納めなかった。その後、ホセ・アンヘル・グティエレスと協力者は合衆国の各地を周って統一民族党の成立を呼びかけた。同党の活動は一九七〇年代に各地に広まった。

(2) ライエス・ティヘリナとアリアンサの運動

ニューメキシコ州におけるティヘリナの運動については右記の三者よりも紙幅を費やす。第一には、彼の運動が

千年王国論的と称されるように [Swadesh 1968]、一見したところ非現実的で不可解な面が多く、説明を要するからであり、第二には、ニューメキシコ州で調査をした私の同州の政治運動への関心が深いからである。ティヘリナの過激な活動は刑事事件となって合衆国全土に報道されたので、まずその事件の経緯をのべ、運動の争点を明らかにし、ティヘリナのリーダーシップの質を問い、動員された人々の数と種類を概観することにしよう。

若干の文献 [Blawis 1971, Nabokov 1969, Steiner 1970: 50-96, Swadesh 1968] から判断すると、ティヘリナと協力者が巻き起こした事件前後の状況は次のようである。

一九五〇年代末からニューメキシコ州北部、特にチャマとティエラ・アマリーリヤ(地図3)の一部のスペイン系の人々の間で土地をめぐる不満が高まり、これをうけて一九六三年にはテキサス州出身のライエス・ティヘリナを指導者とするアリアンサ(授与地連邦同盟)と称するグループが結成された。アリアンサの争点は一八四八年のグアダルーペ・イダルゴ条約に関わっている。同条約により合衆国統治下でもメキシコ系住民の財産は守られると明文化されたにもかかわらず、個人所有地のみならず共有地までがアングロに売却されており、条約に違反することなので返還されるべきである、と主張したのであった。

一九六六年になるとアリアンサの活動は活発になった。七月にはアルバカーキ市にあったアリアンサの本部から州都サンタ・フェまでハイウェイを行進して、州知事に運動の目的を伝えた。さらに、一〇月には国有林のなかにあるエコ・アンフィシアターのキャンプ場を占拠してサン・ホアキン・デル・リオ・デ・チャマ授与地という一八〇六年にスペイン政府より認可された土地を子孫に返すべきであると宣言した。

翌一九六七年の五月にはニューメキシコ州北部で放火や鉄柵の破壊が続ぎ、アリアンサの成員の仕業ではないかと考えるアングロ系住民が多くなった。六月にはアリアンサの人々がコヨテ村で集会を開いているところを警察が襲い、ティエラ・アマリーリヤの郡役所の牢に入れられてしまった。ところが、七月五日にこの郡役所をアリアン

サの成員が襲撃し拘留中の仲間を解放してしまった。州警察が出動し、この事件が全米にテレビで報道された。同月一〇日にティヘリナはこの事件の責任者として逮捕され、しばらく拘留された。

しかし、同年のティヘリナの活動は華々しく、八月にはシカゴにでかけ「新しい政治のための国民会議」に参加し、マーティン・ルーサー・キングと会い、全国レベルの公民権運動組織への接近をはかった。また同年一〇月にはアルバカーキ市でアリアンサの年次総会が開かれ、ブラック・パワーの代表、ホピ・インディアン代表、コロラド州のコーキー・ゴンサレスが参加し、アリアンサの運動が拡大したかの感を与えた。

翌一九六八年二月になると、アリアンサがティエラ・アマリーリヤの牢獄を襲撃したときにティヘリナを目撃したと証言した看守ユーロヒオ・サラサルが何者かに殺害され、アリアンサに疑惑の目が向けられた。この騒動にもかかわらず、この頃のアリアンサの活動は好調で、五月末から六月はじめにかけてはワシントンで「貧しき人々のキャンペン」に大勢が参加して、公民権運動の高まりを一層盛りあげた。

しかし、一九六九年になるとアリアンサの運動は下火になっていった。

既のべたように、一九五〇年代末からティエラ・アマリーリヤの住民は共有地をめぐる問題を抱えていた。そもそも、ティエラ・アマリーリヤはアビキウの分村であった。一八三二年にアビキウの若干の家族がマヌエル・マルティネスを代表者として、当時サンタ・フェにあったメキシコ政府代表部に土地授与を申請して認可された土地であった。共同の申請であり、共有地もあつたが、マルティネス自身はまるで個人所有地のように扱おうとした節が文書の記録から読める、とされている。そこで、アメリカ統治がはじまると、一八五六年には、マルティネスの息子がサンタ・フェの土地登記所にティエラ・アマリーリヤの個人所有権を申請したところ、詳しい調査もなく認可されてしまった【Wesphall 1983: 127-131】。そのうち、土地買占めで悪名の高いT・B・カトロンの投資の対象となり、広大なティエラ・アマリーリヤ授与地が文書上は売却されてしまった。ところがマルティネス家と

もに土地を授与された開拓者の子孫は各人の家と農地に加えて共有地の所有権を持っていたので、一九世紀末から訴訟を起こしていた【Wetphall 1983: 224-229】。とはいえ、時代の流れには勝てず、人々は徐々に個人所有地と共有地を手放し、北部のチャマ付近に放牧可能な共有地がわずかに残っていた。これがサン・ホアキン・デル・リオ・デ・チャマ授与地である。ところが、一九五一年になると、ニューメキシコ州南部のリンカン郡に住むテキサス出身のビル・マンディがこの土地を購入し柵で囲いはじめた【Gardner 1970: 48-49】。最後の放牧地を失ったティエラ・アマリーリヤの住民は窮地に追いこまれた。この状況を打開し、住民の不満を社会的に表現してくれる指導者としてティヘリナが選ばれ、土地返還がスローガンとなったのであった。

果たして土地返還はティヘリナとアリアンサの人々にとって有効な争点になりえただろうか。歴史家ウェストフォールのように、スペインやメキシコ政府が住民に授与した土地についての合衆国の法律上の処理には幾多の不正と違反があつて法的に厳密に調査すれば土地返還を申し立てられる人もいるはずだ【Wetphall 1983: 193-216, 237-268】と考える人もいるが、現実には訴訟に費用がかかりすぎる。そして、ニューメキシコ州の古文書に詳しい歴史家マイラ・ジェンキンスが指摘したといわれるように、土地紛争の多くは一八五四年から一八九〇年までの間には合衆国測量長官の役所で処理され、さらに一八九一年から一九〇四年にかけては共有地への権利を判定する法廷がつくられ、諸問題が法的には決済されてしまったので【Steiner 1970: 50】。この過去を掘り起こすのは至難の業である。

右のような現実があるにもかかわらず人々は抵抗を志し、ティヘリナをリーダーに選んだが、彼はいったいどのような背景を持った人間であり、果たして人々の期待に応えられる指導力を持っていたのであるうか。

ティヘリナは一九二七年にテキサス州でメキシコ系の移動労働者の子として生まれた。家族はテキサス州で綿をつみ、コロラド州で砂糖大根を収穫する移動生活をしたので、ティヘリナは三年間だけ学校教育をうけた。しかし、

一三歳の時、聖書に接し、読み書きを独学で身につけ、一九歳でエヴァンジェリストの聖書学校に通い、その後、ペンテコステ派の「神の集いの教会派」の説教師になり、家族ともども南西部の町々を歩き説教をした。この頃の語り口はアリアンサのリーダーになってからの彼の演説の口調となった。一九七六年の夏、私がアルバカーキ市で会ったときも、聖書からの引用の多い言説が長々と続き、運動の主旨と方法を直截にのべる表現はほとんどなかった。

ティヘリナを土地問題に目覚めさせたのはアリゾナ州での経験である。彼の自伝『土地をめぐる私の闘い』[Tijerina 1978]によると、一九五六年にティヘリナと仲間の七家族はアリゾナ州の砂漠に一六〇エーカーの土地を共同で購入し、「平和の谷」と称し、共同生活をはじめた。ティヘリナ一同にとっては最初に手に入れた土地であり、定着の場にするはずであった。綿花つみに精を出し、皆の収入を集めて家屋を整備しつつあった。ところが「平和の谷」に学校をつくったところ、何者かに放火されてしまった。さらに、ティヘリナがかくまった不法入国のメキシコ人の問題がこじれ、近隣の住民からの圧力が高まった。結局、ティヘリナはアリゾナを離れざるをえなかった。

右にのべた彼が二九歳の時の経験が同じく土地問題で悩むティエラ・アマリーリヤの人々への共感となって現れた。自伝によると[Tijerina 1978: 33]、ティエラ・アマリーリヤの村は一九四五年以降三回もティヘリナを招待している。そして一九五六年にティヘリナ一同が同地に住みつき、同村の土地授与について議論を重ね、現状を把握したうえで既にのべたような抵抗運動を展開したのであった。

ティヘリナ自身は指導者として打ちだした争点に具体的な解決をもたらす策を持っていただろうか。グアダルーペ・イダルゴ条約の文書を実際に見たり、メキシコ国内の援助を得るために七回もメキシコ入りしたが[Tijerina 1978: 43-65, 87, 96, 102, 105]、古文書館で新しい資料を掘りあてたわけではなく、メキシコ政府や要人の支持を

えたわけでもない。彼の旅行の経費はティエラ・アマリーリヤの支持者達が捻出し、不足分はティヘリナがテキサスの農場で働いてえた資金でまかなわれている。そして、一九六六年にはスペインのセビーリヤにあるインディアス古文書館にまで足をのぼしたが【Tijerina 1978: 120-123】、古文書を読む訓練のない人が活用できる対象ではないので、彼が確実な資料をえたとは思われない。さらに、指導者としても支持者から全幅の信頼をえていたわけではない。アリアンサの運動に好意的な研究者スワディッシュでさえ、ティヘリナがテキサス生まれであるうえにプロテスタントであったことがニューメキシコのスペイン系の人々に不信感を与え、ティヘリナに十分な運動資金を渡さなかった、と指摘している【Swadesh 1982: 263】。

争点の研究が不十分で、指導者に対しても不満がありながら、どのような人々がティヘリナとアリアンサの運動に参加したのであろうか。

運動の中核をなしたのはティエラ・アマリーリヤの住民とティヘリナ兄弟やアリゾナ州で共同生活を送っていた人々であった。これらの人々を中核にして参加した人の数は一人人ほどだったといわれているが、人数は確かではない。ニューメキシコ州で政治運動が問題になるときは必ずペニテンテ（十字架上のキリストをまつる宗教結社）の参加が噂されるが、アリアンサの運動へのペニテンテの参加はなかったようである。ティヘリナが最初にティエラ・アマリーリヤの人々と接触したとき、ペニテンテの協力があったと彼はのべているが【Tijerina 1978: 58】、以降のアリアンサの活動にペニテンテが組織的に介入した様子はない。一九六〇年代にはペニテンテの数も減り、集会所であるモラーダの売却例が多くなり、ペニテンテが政治力になるだけの結束はなかったのである【Holms 1982: 245-246】。それでも、アリアンサの活動に多くの人々が興味を示し、デモにも大勢が参加したのは、同州において人々の土地が暴力的な力の論理で収奪されていったことへの怒りを持った人が多かったからであろう。

ティエラ・アマリーリヤ事件が一段落ついでからティヘリナは釈放されたが、一九七八年頃までは政治運動を禁

止された。一九七六年に私がアルバカーキ市の彼の自宅で会った頃はティヘリナは自伝を執筆中であり、『土地をめぐる私の闘い』と題され、一九七八年にメキシコの大手出版社から出版された。その後、北部のコヨテ村に移住し、再びサン・ホアキン・デル・リオ・デ・チャマ授与地関係者と活動をともにしていた。この時点ではティヘリナはカトリックに改宗し、土地の生活に溶けこもうとしていた。しかし、その政治力は弱体化し、一九七九年の九月にカンヒロン近くで反核運動が起こり、それに参加しようとした折りに、リオ・アリーバ区の統一民族党から拒否されている [The New Mexican, July 20, 31, 1979. Newsweek, Sept. 24, 1979]。

しかしながら、一方ではサン・ホアキン問題は好転していた。一九七九年三月に同授与地に関する文書が発見され、現在の国有林の一部が元々は同授与地に属した共有林であったことが明らかになり、ニューメキシコ州選出の下院議員でスペイン系のマヌエル・ルハンが法務局に審議をはじめるように要請したからであった [The New Mexican, Sept. 13, 1979]。その後、この問題がどのような展開をとげたかについては、残念ながら私は資料を持っていない。

右にのべてきた四人のリーダーによる運動に加えて、各州で広まったものに青年層の政治・文化面での覚醒運動があった。イースト・ロサンゼルスではじまった「ブラウン・ベレッツ (茶色の帽子)」が典型的であるが、同時などの州でも数々の青年組織が出現し、教育上の差別など身近な問題に取り組み、文化的ルーツを求めて出版活動や小劇場の開催に努力した。移民の第三世代にあたる青年たちは同化に励んだ二世とは異なり、自らの発見に努力した。全国的なこの動きを受けて、一九六九年には「アストランのチカノ学生運動」(MECHA) が結成され、チカノがアステカ文化の揺籃の地から由来し元々は南西部の土着民であった、と声明した。こうして、アメリカ社会に同化せず、自らのルーツに誇りを持って生きようとする姿勢が高学歴の青年層から出てきたわけで、メキシコ系の人々に大きな影響を与えた [Cortés 1980: 718, González 1969: 186-195]。

保守的なカトリック教会にもチカノ運動の影響は広がった。一九七七年にはメキシコ系の司教が増やされ、チカノ問題への教会の配慮がみられるようになった。運動を支援する司祭もでてくるようになり、南西部のカトリック教会は活性化されつつあった〔Cortés 1980: 718〕。

しかし、一九七〇年以降ではチカノ運動の急速な躍進は期待できない。一九七五年にヴェトナム戦争が終わり、世論は保守化し、六〇年代の公民権運動の高まりは昔日の姿となった。そして、その頃に問題にされた現実は今でも残っている。教育水準の低さ、言語のハンディキャップ、参政率の低さ、不法入国者など、次々と問題があげられる。しかし、草の根レベルの人々の努力で徐々に改善が試みられ、民族文化の復興も企てられるようになった。

三、ヒスパニック連合の動向

前節の記述から明らかなように、メキシコ系アメリカ人の間にさえ団結が困難な現実があるにもかかわらず、七〇年代から、スペイン語を話す人々をまとめて一つにする「ヒスパニック連合」が少しずつ進められている。そもそも「ヒスパニック」(Hispanic)とはスペイン語系の人々ということであり、メキシコ系(スペイン系を含む)、プエルトリコ系、キューバ系、ドミニカ共和国からの移民、中央アメリカの人々、南米からの人々、スペイン人などを包含している。このヒスパニックの人々の間にまとまりがあるかというところではなく、一九七〇—八〇年代になって初めて必要にかられて時折、政治上の効果のために連繫しているのが現実である。というのは、ヒスパニックを構成している各民族集団の移民経験が異なり、なかなか簡単に一致団結できないのである。

ヒスパニック人口の六〇パーセント以上を占めるメキシコ系(スペイン系を含む)のことについては既にのべたので繰り返さない。これに次いで多数を占めるのはプエルトリコ系である。プエルトリコは米西戦争後、一八九八

年に米国領となり、以降五〇年に渡って植民地となったが、一九一二年にプエルトリコ人は合衆国の市民権を与えられ、一九五二年には合衆国の連邦となった。この間、合衆国の資本により島の資本主義化が進み、自力のない植民地型福祉社会になってしまった。一部のインテリが独立運動を起こそうとするが、一般人は独立を喜ばず、島で生活が成り立たない場合や、より良い生活を求める場合には合衆国に出稼ぎにでて、市民権を持っている特権を行使して、多くの人々がそのまま居残ってしまう。一九九〇年におけるプエルトリコ系の人口は二七二万以上で、半数ほどがニューヨーク市に住み、特にイースト・ハーレムとローアー・イースト・サイドに固まっている。生活はニューヨーク市の経済状況に左右され、未熟練、半熟練労働者の多いプエルトリコ系は収入が低く、住宅に恵まれず、失業して生活保護を受ける率が高い。しかし、専門職の人も増え、進取の気質のある人はニューヨークを離れるようになり、ハートフォード、シカゴ、ニューアーク、ボストン、フィラデルフィア、クリーヴランド、ロサンゼルスにプエルトリコ系のコミュニティが現れた。なお、プエルトリコ系は数々の大学を持ち、ASPIRA（プエルトリコ系主席役員協会）など多くの相互扶助組織を持ち、政治的には民主党支持者が多く、「Gann and Duignan 1986: 69-93, 194-195」。

キューバ移民は、バティスタ政権時代には一五五〇〇〇人ほどにすぎなかったが、一九六一年にカストロ政権がマルクス・レーニン主義を表明して以降、避難民として大挙して入ってきた。CIAの援助を得てビッグズ湾に侵攻する計画がキューバ人の間で進められたが、ケネディ大統領の指示を最終的には得られず、計画は頓挫し、これ以降は避難民は移民と化した。一九九〇年にはキューバ移民は一〇四万以上で、ほとんどがマイアミ市とフロリダ半島の諸都市に住んでいるが、ウエスト・ニューヨーク、ジャージー・シテイ、ニューアーク、ブリッジポート（コネティカット）、ロサンゼルス、シカゴにも拡大している。労働者層に加えて、専門職の中産階級の移民が多く、カストロ政権でさえ人材の流出に苦慮しているといわれる。キューバ移民の多くはケネディのいわゆる「裏切り」

の後には民主党離れを示し、共和党支持者が多くなっている [Didion 1987, Gann and Duignan 1986: 94-111]。

カリブ海ではプエルトリコとキューバに次いでドミニカ共和国からの移民が多い。一九六〇年代以降の移民がほとんどである。主としてニューヨークに住み、特にマンハッタンの北半分とクイーンズのコロナ・ジャックソン・ハイツ地域に固まり、プエルトリコ人と住分けを示している。また、ニューヨーク市周辺の産業都市にも拡大しているが、マイアミにも多い。生活状況はプエルトリコ人と似ている [Gann and Duignan 1986: 114-118]。

中央アメリカではエル・サルバドル、パナマ、グアテマラ、ホンデュラスから移民がみられる。本国の政情不安や人権侵害が移民をつくつてしまう要因である。ちなみに、エル・サルバドル移民の多くがロサンゼルスに住み、エル・レスカテ（南カリフォルニア全キリスト教会会議）の援助を得て、定着の道を模索している [Gann and Duignan 1986: 118-119]。

南米ではチリ、アルゼンチン、ウルグアイ、コロンビアなどからの移民が多い。概して、教育に恵まれ専門職につける人が多い。特にニューヨーク市に住むコロンビア人は生活程度が高く適応に成功しているといわれる [Gann and Duignan 1986: 118-125]。

右の概括から明らかのように、ヒスパニックの内訳は種々様々なので、一丸となって政治活動を進める状況ではない。それでも、市町村、郡、州レベルでは民族票を集めることは可能であり、チカノの多い南西部諸州では成功しているし、キューバ人の多いマイアミでキューバ系プエルトリコ人市長が選出されたり、プエルトリコ系の多いニューヨーク市で同民族集団が市政に大きな影響を与えたりしている。またプエルトリコ人研究者パディーリャの報告 [Padilla 1985: 84-118] によると、一九七〇年代の初めにはイリノイ州のシカゴ市でプエルトリコとメキシコ系住民が「就労のための共闘連合」を組織し、イリノイ・ベル電話会社とジョウエル・ティー食品会社を相手どって雇用の平等を訴え、スペイン語を話す労働者を両会社に就労させることに成功した例もある。

連邦レベルになるとスペイン系の人々の多いニューメキシコ州を除いてはヒスパニックの代表をだすことは困難であった。ところが、一九七〇年代から八〇年代の初頭にかけてヒスパニック票の力が目立ちはじめ、センサスでもヒスパニック票という言葉が使われはじめた。一九八二年には四〇の下院議員選挙区が二〇パーセント以上のヒスパニック人口を持つようになり、七つの選挙区ではヒスパニックが絶対多数を占めている〔Gann and Dugan 1986: 224〕。前者の選挙区ではヒスパニックは大勢を左右できるし、後者の選挙区では大勝できるはずである。ところが、予想通りに事が運ばないのは、ヒスパニック連合が弱いことやヒスパニックの投票率の低いことに加えて、候補者の成熟度が充分でないために一般のアメリカ人の票をえられないという現実がありそうである。

連邦議会の議員と並んで連邦レベルでヒスパニックのために活動できるのは大統領指名の特別職である。ヒスパニックを最初にとりあげたのはニクソン大統領であるが、最も積極的にヒスパニックを採用し政策面で効果を納めたのはカーター政権であった。ヒスパニック関係部門についての大統領付き特別顧問にはエステバン・トレスが指名され、同氏は後ほどカリフォルニア選出の下院議員となり、この人が一九八六年の中曽根康弘首相の黒人やヒスパニックへの差別発言に抗議したヒスパニック議員連盟のリーダーであった。レーガン政権下でもヒスパニックが何人か特別職についたが、票集めのための政治色が強い、と評されている〔朝日新聞 9.24, 27, 10.4, 1986. Vigil 1987: 71-75〕。

数の割には政治的に効果を出せない現実を前にして、ヒスパニック内部の民族差を越えて協力しようとする動きがでてきた。第一に、一九七七年にはヒスパニック議員連盟（CHC）が組織された。創設者はニューヨーク選出のプエルトリコ系下院議員のヘルマン・パデイリョで、全米のヒスパニック集団の統一と団結を目的とした〔Vigil 1987: 65〕。一九八三年には一四〇人の成員を持ち、シンプソン・マツォリ法案（移民抑制法案）を廃案にもちこむのに努力し、以降もラテンアメリカ諸国との友好のために発言しているが、反対することに主力が費やさ

れ積極的提案を提出できない、と批判されている [Gann and Duignan 1986: 225, 230]。第二のヒスパニック組織はラテイノ選出・指名役職者国民連合 (N A L E O) で、一九七九年に組織され、政治色の強い公的資金をさけ私的組織の資金を頼りにして運営され、ヒスパニックの投票登録、ビジネス、法案などに関心を示している。第三は、一九八三年に結成されたヒスパニック・フォース八四年と名づけられた組織で、ヒスパニック票を連邦レベルの政治に反映することが目的で、ニューメキシコ州知事トニー・アナヤの指導下に組織されたが、民主党の利益と結びつきすぎる、と批判されている [Gann and Duignan 1986: 225-226]。

ヒスパニックを統合する組織は一九七〇年代後半から八〇年代のはじめにかけてつくられたところであり、その政治的効果が発揮されるにはこれから何年もかかりそうである。ヒスパニックはローカルなレベルで代表権を確保し、それを積み上げていくことで州レベルに利益を表現していくしかほかに方法はないだろう。

一九八九年本稿を書き終えて間もなく、ブッシュ新政権が誕生し、二名のヒスパニックが要職に指名された。マヌエル・ルハン (ニューメキシコ州出身のスペイン系) が内務長官に選ばれ、ラウロ・カバッス (ヒスパニック) が教育長官に留任することになった [朝日新聞 1.14, 1989]。一九八〇年代末から九〇年代の政治面については政治学者の研究 [大津留 2000] を参照してほしい。